

家族計画に関する研究

—Lippe's Loop の受胎調節効果に関する研究(2)—

研究第1部(前部長) 我妻 堯
千賀 悠子

I はじめに

受胎調節に対する子宮内避妊装置 (IUD) の応用は、特にわが国に於てその歴史は古い。しかしながらさまざまな社会的、医学的理由によってその普及は必ずしも順調な道を辿ったとはいえない。一方、欧米諸国および開発途上国に於ては、人口問題に対する関心がたかまり、簡便で安価な受胎調節技術の開発がすすめられるにつれて、IUDが新しい角度から見なおされるようになり、基礎的、臨床的研究もさかんにおこなわれるよう

になった。

先に発表したように、愛育病院家族計画外来に於ては、分娩後ならびに人工妊娠中絶後の婦人に受胎調節指導をおこない、昭和43年6月以降、希望者に対して Lippe's Loop を挿入し、臨床経過を追跡調査しているが、その後例数が増加したので、昭和46年10月末までの結果について分析を試みた。

II 調査結果

1. 対象

昭和43年6月初めから46年9月末迄の3年4か月間に395例の婦人に対し、Lippe's Loop を挿入した。使用した Loop は、Bサイズ、Cサイズ、Dサイズの三種類で、挿入方法ならびに経過追跡方法は、前回発表した通りである。

なお最小のサイズは自然脱出率が高頻度のために、途中で挿入を中止した。

2. 年令分布

第1表に示す如く、25~29才の年令層が最多で50%、30~34才が25%でこれにつき、21~24才ならびに35~39才が第三位(約10%)となっている。結婚年令の分布も、第1表に示すように、21~24才で結婚したものが最多、ついで25~29才で、これらは前回の発表と大きな差はない。

3. 妊娠歴

第2表の如く、分娩回数2回が47%で最も多く、また既往妊娠歴の中で、人工妊娠中絶を経験したものが、395名中、153名(38%)におよんでいる。生児数(第3

表)は1名が32%、2名が47%、3名以上が20%、年令と生児数の関係では、25~29才で子供2名を有する婦人が、102例で最も多く、同年令層で子供1名が71名でこれにつぐ(第4表)。

4. 子供の数と将来の方針(第4表)

生児数が1名のもの127例の中で114例が「間をおいて子供がほしい」と解答しているのに対し、10例が「もう不要」と答えていることは注目に値する。生児2名では、184例中、86名が「もう子供は不要」と答えているが、「間をおいてほしい」もの63例、未定が35例いる。生児3名では「不要」が70例中53例、生児4名以上の9

第1表 年令分布

年令	挿入時年令別例数	結婚年令別例数
~20	3	33
21~24	43	198
25~29	200	143
30~34	102	20
35~39	34	1
40~	13	0
計	395	395

第2表 分娩回数、自然流産回数、人工流産回数

回数	分娩回数別例数	自然流産例数	人工流産例数
0	3	303	242
1	124	70	99
2	187	16	40
3	69	3	6
4	9	0	5
5以上	3	3	3
計	395	395	395

第3表 生児数別例数

生児数	例数
0	5
1	127
2	184
3	70
4	7
5以上	2
計	395

第4表 生児数と年齢、今後の方針の関係

生児数	年 令						今 後 の 方 針			計
	20~	21~24	25~29	30~34	35~39	40~	子供は欲しくない	間をおいて	未 定	
0	0	1	2	0	2	0	1	3	1	5
1	3	31	71	15	4	3	10	114	3	127
2	0	10	102	52	18	2	86	63	35	184
3	0	1	25	30	9	5	53	7	10	70
4	0	0	0	5	1	1	7	0	0	2
5	0	0	0	0	0	2	2	0	0	2
計	3	43	200	102	34	13	159	187	49	395

第5表 男児数と今後の方針

今 後 の 方 針	生児0		生 児 1		生 児 2			生 児 3			生 児 4 以上		
	男児0	男児1	男児0	男児1	男児0	男児1	男児2	男児0	男児1	男児2以上	男児0	男児1	男児2以上
子供は欲しくない	1	4	6	22	41	23	5	19	29	2	1	6	
間をおいて	3	50	64	9	32	22	0	2	5	0	0	0	
未 定	1	1	2	6	19	10	1	4	5	0	0	0	
計	5	55	72	37	92	55	6	25	39	2	1	6	
	5	127		184		70		9					

例は、全員が子供をそれ以上のぞんでいない。

5. 男児の数と将来の方針 (第5表)

ある国の社会習慣や風習の影響によって男児が女児よりも希望される場合があり得る。その場合には、生児2名を有する夫婦で男児を1名でも有する夫婦の間では、「もう子供は不要」と考える率が高くなる筈である。調査対象の中で、生児2名を有する184例について調べると、男児1名、女児1名を有する92例中、41例(44%)は「児をこれ以上望まず」、女児2名の37例は22例(55%)が「児をこれ以上望まない」と答えている。

男児2名の55例中では23例(42%)が同じく「児をこれ以上望んでいない」ので、これらの結果から、男児1名、女児1名を有する夫婦の方が現状に満足して、それ以上、児を望まない傾向や、男児をうんだものの方に、それ以上児を望まない傾向が強いことは認められなかった。

6. 効果の判定

従来は、IUD、経口避妊薬、その他の受胎調節方法による避妊効果の判定には、Pearlの妊娠率が用いられていた。この方法は調査期間中における「妊娠件数」

を、調査対象婦人数と使用期間との積にあたる「延使用期間」で割って1200をかけ、100女性年あたりの妊娠数として表現するものである。簡便ではあるが、たとえば、1000人の女性がある方法を1年間使用した場合も、500人が2年間使用した場合も、200人が5年間使用した場合も、全て分母の数字が同じとなるため、不都合を生ずることがある。

このような欠点を補い、年月の経過を考慮して使用対象の推移をより客観的に表現するために、Tietze³⁾は生命表方式 (Life table Method) による受胎調節効果の算定法を発表し、現在ではこの方法が最も国際的に広く用いられている。

くわしい計算法は省略するが、今回の調査結果を計算したのが第6表である。なお昭和43年6月初めから、31か月後までの、379例につき計算した。のべ調査期間は、6790女性・月 (women-months of use) で、表の数字は、31か月後における女性100名当りの率として計算してある。

適当な訳語が無いので英語の表現法をそのまま用いているが、Events は、抜去したり脱出したりした場合の出来事 (事象) を全て表現するもので、必ずしも中止を意味しない。従って100名の女性にIUDをいれて31か月经過する間には、16.7人に自然脱出がおこるという意味でその中の何人かは、再び挿入をうけ、3人が再脱出を経験しているという意味を現わす、同じように100名中8.9人が医学的理由でIUDを除去したが、その中の何人かは再び挿入をうけている。

これに反してClosureの方は、中止を意味している。第6表の2についていえば、100人に挿入して31か月後には、5.8人が妊娠、7.5+2.7=10.2人が1回以上の脱出中止、7人が医学的理由で除去中止、3.1人がその他の理由で除去、21.3人は次の子供がほしくなり、次回妊娠計画のため除去、合計して100人中、47.4人が除去し、52.5人が現在Loopをつづけていることを意味する。従って31か月後の継続率は約50%である。

妊娠例は、Loopがはいったままの妊娠も、脱出に気付かないで妊娠したのも全て合計した。100について31か月後に6という数字は、他の研究者の発表と大体同じか、稍高いが、Loop B. が含まれていたためではないかと思われる。たとえば、Tietzeは2年後にLoop Bで6.3、Cで4.8、Dで4.2という妊娠率を得ているが、今回の成績はこのBとほぼ同じである。Tietzeの成績と比較した場合、自然脱出率にはあまり差がない。また出

第6表の1. 生命表方式による効果の判定

6790 Women-months of use.	
Rate per 100 women after 31 months	
Events	
妊 娠	6.1
第1回脱出	16.7
第2回以上脱出	3.0
医学的理由による除去	8.9
医学的理由以外による除去	3.3
次回妊娠を望んで除去	21.3

第6表の2. 生命表方式による効果の判定

6790 Women-months of use.	
Rate per 100 women after 31 months	
Closure	
妊娠により中止	5.8
初回脱出により中止	7.5
2回以上脱出により中止	2.7
医学的理由で除去中止	7.0
医学的理由以外の理由で除去中止	3.1
次回妊娠希望により除去	21.3
中止例合計	47.4
累積継続率	52.5

血、下腹痛、その他の医学的理由で除去中止をした率は7.0であるが、これは他の成績に比してむしろ低く (Tietze 8.7~16.4)、出血例などの中には、治療や観察を十分におこなえば除去の必要がないものも含まれていることを示している。次回の妊娠を計画して除去したものが比較的多いことは、今回のIUD使用対象の約1/3が、初産後の間隔をあけるために挿入をうけたものであることから当然のことといえよう。またこれらの婦人の大部分は抜去後数か月以内に妊娠し、既に無事生児を得たものも少なくない。

7. おわりに

愛育病院家族計画外来でLippe's Loopの挿入をうけた395例の婦人について、経過観察をおこない、IUDによる避妊法が十分効果を有し、副作用も少なく、出産間隔をあけたりするために有意義な方法であることを認めた。

妊娠率をさらに低下させるためには、器具そのものの検討も必要であると思われる。